

街の商店街から認知症予防を推進

認知症予防サポート協会

したキャンペーンイベントを空堀商店街で開催し、認知症予防と早期発見の啓発活動を展開した。

超高齢社会のわが国においては、最近ますます認知症発症率が高くなり、すでに世界第1位と言われている。また、その予備軍である軽度認知障害も入れると、患者数が2025年には1300万人を突破すると危惧されている。

一方、各地の商店街にも高齢化の波は押し寄せており、空店舗が目立っているのが現状だ。こうした中、空堀商店街は、豊臣秀吉ゆかりの地として火災の難も逃れ、昔ながらの伝統と現代の文化が融合した街として、地域の

人々が共生の気持ちを持って暮らしている。

認知症予防サポート協会では、「空堀商店街を高齢化問題の中でも特に課題の多い認知症問題に地域の人々と取り組む商店街の起点として、認知症予防に取り組む輪を全国に広げたい」という理念のもと、地域の認知症予防に尽力している。

この日の応援イベントでは、ボランティアによるハンドトリートメントをはじめとする認知症予防の各種取り組みや、カルチャー&ワークショップ、さらには高齢者によるエンターテインメントなど各種イベントに大勢の地域住民が参加し、認知症予防に興味を寄せた。



参加者で賑わう空堀商店街



認知症予防ゲーム

認知症予防サポート協会(大阪市・代表理事：鳴川正氏)は、9月20～23日の4日間、大阪市中央区にある空堀商店街との共催で、同商店街アーケード下全域において「9・21を認知症の日に！」応援イベントを開催した。

毎年9月21日は「世界アルツハイマーデー」として世界各地で啓蒙活動が行われており、わが国もこれになって、同日を「認知症の日」として制定する動きが出ている。認知症予防サポート協会では、この「認知症の日」制定に先行



ボランティアによる認知機能チェックシステム(左)と、ハンドトリートメント